

へるん先生の汽車旅行



小泉八雲、旅に暮らす

序章 津波

安政の南海大地震

T S U N A M I (津波)——という今では世界共通語となった言葉を、最初に日本から発信したのはラフカディオ・ハーン(一八五〇—一九〇四)だった。明治三〇(一八九七)年のことである。

ハーンの掌編「生神様」は幕末に起きた安政南海地震の大津波を題材にしている。

安政南海地震は安政元(一八五四)年、旧暦一月五日午後四時に起こった。その三二時間前には安政東海地震が発生している。震源地は異なるが、ほとんど同時だったといっている。翌二年一〇月には安政江戸地震があり、日本列島はわずか二年の間に三度の巨大地震に襲われたことになる。

安政南海地震はマグニチュード八・四、震源地は紀伊半島から四国沖の海溝、いわゆる南海トラフ沿いで起こった。震度六〜七で、被害は中部地方から九州に及び、死者は数千人と伝えられている。当時日本の人口は三〇〇〇万人ほどしかなく、行方不明者や倒壊建物の数など正式な記録はないが、被害の大きさは想像に難くない。

ハーンが「生神様」の題材を得たのは和歌山県有田郡ありだ広川町ひろがわちようの津波であつた。当時は紀州藩広村だつたが、震度六強、高さ八メートルの大津波で、村の二九九戸のうち一二五戸が流失し、三六人が犠牲になつた。

稲むらを焼き払い、危機を伝え、村人を救済した濱口梧陵はまぐちごりようにハーンは感動を受けた。

「生神様」のストーリーを踏まえれば、津波が来たのは地震の三〇分後のことで、すでに日は暮れかかっていた。濱口五兵衛ごへえ（梧陵の仮名）は村の長者で、海を見下ろす高台に屋敷があり、村全体が見渡せた。そこにはいつもと変わらぬのどかな里の夕景が広がっていた。村人は宵祭りの準備に忙しく、誰もが地震に気がつかなかつた。

濱口は沖に異常な変化があることに気づいた。波が奇妙な動きをしていた。津波を予感した濱口は孫に松明たいまつをもつてこさせ、自分の田に束になつて置いてあつた稲むらに火をつけた。稲むらは刈り取つた稲を束ねたもので、貴重な年貢米だつた。火などつけたら犯罪行為となり、その場で打ち首となるはずである。孫は祖父が突然気がふれたか、と思い、泣き出してしまふ。

村人は燃えさかる炎を見て、長者の家が燃えたのかと、驚いて次々に丘へ上がってきた。

稲むらの火が津波の警鐘とは気づかず、火事だと思って駆けつけた村人たちは難を逃れた。濱口のわが身を顧みない^{かえり}とつさの判断が村人の命を救ったのだ。彼らは濱口の前へ進み出て、地面に手をつき、深々と頭をたれた。村人たちはその恩義を忘れず、村の再建がなったとき、「濱口大明神」として奉り、その高德を崇^{あが}めた。

日本の神社に祭られる神は、古代の英雄や過去の歴史上の人物が多いが、現世に生きながら祭られる「生神様」の存在があるということを、ハーンは濱口を例にして物語った。

「生神様」の存在は、西洋にはない日本独特の神の概念であること。神道の中心となる宮や社は shrine とか temple と訳すよりも、死霊、生霊が集う ghost-house (霊のすむ家) といったほうが理解しやすい、とハーンは述べている。

そこには西洋の教会寺院で見られるような、きらびやかな装飾や神々しい聖像などなく、ただ自然木で作られた素朴な建物(社)があり、なかには鏡や紙垂^{しで}が置いてあるだけだ。その中を祖先や偉人たち、また生きた人間の霊たちが自由に行き来している。

穏やかな有田みかんの里

平成二三（二〇一一）年十一月二三日、私は和歌山県広川町へ向かっていた。

最寄りの駅は 紀勢本線（きのくに線）の湯浅駅で、大阪・天王寺から特急「くろしお」に乗り、一時間くらいのところであった。

夕方近く高台にある宿に旅装を解き、窓から眺めると、みかん畑の向こうに海が夕日を浴びて銀白色に輝いていた。紀伊水道である。湯浅湾は大海を前に「く」の字を描き、砂浜に松林が続き、その隅に小さな漁港を抱いている。銭湯絵のような白砂青松の海浜の風景である。

眼下に紀勢本線の水色の通勤電車が、鉄道模型のように小さく見え、時折ガタゴトと空気を震わせて走ってゆく。屋根の低い平屋の家々は黒瓦を波打たせ、静かな夕暮れを待っている。遠浅の穏やかな海とセピア色の町並み、どこからか夕餉の家族団欒の声が聞こえてくるようだ。時代を一五〇年戻しても、二、二の雑居ビルをのぞけば、濱口梧陵の見た風景とさほど変わりが無いように思う。この夕まずめの静寂を津波は突然破った。

翌朝、広川町へ向かう。宿で手配してくれたタクシーの運転手に濱口ゆかりの地を尋ねた。ややあって運転手は「銅像を見ますか」とポツリと言ひ、車を走らせた。駅方面に戻り、古い

町並みを抜け、一級河川の広川を渡ると隣町の広川町、昔の広村だ。海岸通りに下ると、中学校があり、広々とした校庭の片隅に濱口梧陵の像が立っていた。

広村堤防、耐久舎、濱口家代々の屋敷、墓など、運転手は濱口ゆかりのポイントを私の手にもつ地図に落とし、「みんな歩いてゆけるところだから」と、私を校庭にひとり置き、車を返した。

手袋を片手にもち、立襟シャツ、フロックコートに身を包んだ濱口梧陵の像は、ハーンの描いた「村の長^{おさ}」とはいささかイメージが違った。

碑文を読むと、梧陵は現在、銚子^{ちょうし}に本社があるヤマサ醤油の七代目の当主だったのだ。広村は隣の湯浅とともに、熊野^{くまの}古道往来の要所として栄えたところで、醤油生産、漁業、みかん栽培が盛んな土地柄だった。

鎌倉時代に紀伊^{ゆい}由良^らの僧が中国の金山^{きんざん}寺^じ味噌の製造法をこの地に伝えた。その製造過程から偶然醤油が生まれた。その後紀州藩の保護を受け、江戸末期には醤油製造元が湯浅に三三軒、広村に七軒あったという。ヤマサ醤油の創業は正保二（一六四五）年で、そのなかでも老舗^{しにせ}であつた。

たまたま梧陵が広村に帰郷していたとき、地震があり、大津波が発生した。ハーンの語る梧陵の功績は、稲むらを焼き、人々を安全な高台に誘導したことにある。だが、事実はそのだけ

ではなかつた。

学校の裏手に木造、白壁の小さな建物があつた。耐久舎と呼ばれる道場で、梧陵はそこで私塾を開設し、村の青年たちに武術や国学、漢学を教えた。ちなみに校庭に梧陵の像の立つ耐久中学校は梧陵の精神を校名に残したものである。

広村堤防は耐久中学校の裏手から港へ六〇〇メートルほど続いている。松、櫨はぜが植えられ、海岸沿いの遊歩道という雰囲気である。芝生の植えられた堤の道は、夏の海水浴の頃には恰好のビーチサイドプロムナードとなるだろう。

堤防の中ほどには感恩碑が立っていた。昭和南海地震の折、この堤防のおかげで、被害を免れた町民が梧陵に感謝して建てたものであつた。

「百世の安堵あんどを凶れ」——。梧陵は一〇〇年後の村の将来を案じ、同じ災害が来ることを予想して、自ら堤防を築くことを決意した。築堤事業は同時に、田畑や漁船をなくした村人の失業対策でもあつた。梧陵は故郷の美しい村が、津波で消滅することを恐れた。

築堤工事は震災の翌年、安政二（一八五五）年二月に着手され、三年一〇カ月を要し、完成は安政五年一二月だつた。一日五〇〇人、職をなくした村人は老若男女、子供まで雇用され、完成までのべ五万七〇〇〇人が参加した。参加者には日当がその日に支給され、生活の糧かてとなつた。工費だけで金三五九〇両（現在の価値でおよそ五億円になる）、すべて梧陵が私費を投じ

て行った。これが歴史に残る広村堤防である。

梧陵の予言通り、およそ一〇〇年後の昭和二一（一九四六）年、昭和南海地震が起こり、村は五メートルの津波に襲われたが、堤防が津波を防いだ。堤防周辺の集落は民家の一部が浸水した程度で事なきを得た。

梧陵は醤油製造事業を受け継ぎながら、新時代の日本に夢を託し、勝海舟かつかいしゅうや福沢諭吉ふくざわゆきちとも交流があつた。明治四（一八七一）年に初代えきていのかみ駅逓頭（のちの郵政大臣）に任命され、故郷に戻つてからは和歌山県議会初代議長の役目を果たした。しかし、待望の訪米旅行のさなか、ニューヨークで客死した。六四歳だつた。

濱口梧陵は老人ではなかつた

ハーンがこの「生神様」を書いたきっかけは、明治二九（一八九六）年六月に起こつた明治三陸地震だつた。

明治三陸地震は釜石かまishiの東方沖二〇〇キロメートルが震源地で、マグニチュード八・二（八・五、最大三八・二メートルの津波が三陸海岸に押し寄せ、死者約二万人と伝えられる。田老村たろう（現・宮古市田老地区みやこ）では、村中の三四五軒が一軒残らず流失し、村の人口二二四八人のうちの約

八割の一八六七人が犠牲になった。

このとき、ハーンは神戸の英字新聞社に勤めており、各地から送られてくるニュースを見聞きし、かねて伝え聞いていた安政南海地震の濱口梧陵の逸話を思い出した。

「津波だ！」

と人々は叫んだ。しかし人々の叫びも、音も、またその音を聴く力も、すべて百雷ひゃくらいよりも重い、なんとも名状しがたい衝撃でもって打消された。盛りあがった巨大な波が、轟然ごうぜんたる力をふるって海岸にぶち当たったが、そのために岡という岡を震えが走つたように感ぜられた。そして稲妻が一瞬、雲全体を白く照し出すように、白いしぶきが幕状に立ちのぼった。その次の一瞬は、斜面を雲が湧くように昇ってくる荒れ狂った水沫以外は何ものも見えなかった。

（「生神様」『日本の心』平川祐弘訳）

ハーンが描いてみせた津波の情景は、平成二三（二〇一一）年の東日本大震災でテレビやグラフィ誌の報道で繰り返し見た風景とまるで変わらない。

最初は潮が引くように海水が陸地から沖へと走ること。海藻のついた海底の岩が露出する。

水平線に一条の影ができ、それが断崖のように聳え、凧が宙を飛ぶよりも速く岸へと押し寄せてくる。一度襲った波が去ると、ふたたび海は唸りながら引き返す。二度、三度、四度、襲来したかと思うと、また引き返す。村の住まいや神社のあたりが崩れ、深海から運ばれた海藻や砂礫が散らばる。村は跡形もなく、沖の海上では、藁ぶきの屋根が狂ったように揺れ続けている。

津波の押し寄せる速さ、津波が頭上から叩きつぶすように落下し、人家を破壊するところなど迫真の描写だ。

しかし、主人公の濱口梧陵に関しては、濱口五兵衛の仮名を使い、年老いた村の長者にしている。実際の濱口はこのとき、三四歳の逞しい青年だった。家は海辺に近い街なかにあり、梧陵自身も津波に流されたが、幸運にも陸地に漂着し、人々を高台に誘導する。道端の稲むらに火をつけたのは事実だが、自分の財産を燃やしたわけではない。夕闇のなかを漂流する村人たちに安全な場所を指し示すためだった。

ハーンは和歌山まで取材に行かなかったから、おそらく新聞記事で知ったのだらう。あるいは聞き伝えの話をもとめたのかもしれない。しかし、それにしても、どうして濱口の実像を語らなかつたのか。梧陵の功績は、村の再建のために築堤したこと、教育者であったことのほうが評価されるべきである。なぜ「全財産を焼き尽くして村人を守った」という美談に終始した

のか――。

私は疑問を残したまま和歌山を後にした。

ハーンは、へんな外人だった

私は今、ラフカディオ・ハーンの物語を書こうとしている。

ハーンは明治二三（一八九〇）年、アメリカから来日後、島根県の尋常中学校の英語教師として松江に暮らし、出雲地方や日本全国に残る民話や伝説を収集して『怪談』という名作を世に残した。小泉セツと結婚し、日本に帰化し、小泉八雲と名乗った。

ハーンとの出会いは私が高校生するときだった。もはや半世紀も前のことになるが、名古屋で過ごした高校時代、修学旅行で山陰地方を訪れ、松江城下のハーンの旧居（根岸邸）を見学した。根岸家の末裔というお婆さんが案内役で、「へるん先生」（ハーンは松江ではこう呼ばれた）の紹介をしてくれた。

羽織袴を着て、神社にお参りに行き、そばや刺身を食べて「おいしい、おいしい！」と舌鼓を打ったこと。風呂に入るハーンの裸姿を一目見ようと、軒先に隠れて固唾をのむ少年たちのこと。当時、松江では外国人の尻にはしつぽがついている、という噂が流れていたらしい。

ちようど帰化した仏国のコメディアンが「ヘンな外人！」という言葉が流行させ、ブラウン管で人気のあつた頃のこと、お婆さんの説明のオチ「ヘンな外人！」に皆が爆笑した。

「そうか、この男も考えてみれば、ヘンな外人だったのだ」——そう思うと、急にハーンに親しみが湧いた。

アメリカからやってきた、というのも意外だった。それまでつきり、ハーンはイギリス人だとばかり思っていた。高校時代、ハリウッド西部劇に夢中だった私は、ハーンがやってきたというシンシナテイという町に興味をもった。ステイヴ・マックイーン主演の映画『シンシナテイ・キッド』が公開されたばかりの頃だったのだ。あの中西部の埃っぽい、無法の街から粹がってやってきたのかと思うと、小泉八雲という古めかしい、明治時代の文豪としてのイメージがまったく変わってくるのだった。

それ以後、松江を訪れるたびにハーンは気になる存在として私の心のなかで増幅していった。というのは、私の本籍地は京都府中郡峰山町なか みねやまちょう（現・京都府京丹後市きょうたんご）で、日本海の片隅にあり、松江にも近かったのである。

峰山には祖先の墓があり、子供の頃、父母に連れられ、盆や正月にたびたび訪れた。当時名古屋から急行「大社たいしや」があり、東海道本線、北陸本線、小浜線、宮津線みやづ経由で出雲市へと直通で走っていた。途中スイッチバックが三度あったり、風光明媚ふうこうめいびな日本海沿岸をひた走るユニー

クなディーゼル急行で、この列車のおかげで私は鉄道旅行が好きになったのかもしれない。墓参りをした後、翌日の同じ列車で松江まで足を延ばし、出雲大社に詣で、玉造温泉で精進を落とす、というのがわが家の恒例の行事となっていた。

松江はこぢんまりとした美しい山陰の城下町で、古い民家や古刹が点在し、たびたび訪ねると、なじみの本屋や駄菓子屋ができ、懐かしい第二の故郷のように思えるのだった。出雲は神話時代の太古の歴史が息づくところで、日本という国が造られるなかで、歴史の闇に葬られた猛々しい古代の神々への興味は尽きない。

小泉八雲旧宅を訪れるたびに、外国人であるはずのハーンが、なぜ日本の文化にそれほど固執したのか、なぜ日本に帰化したのか、という疑問が心の隅にずっと居座り続けた。

ハーンとは一体いかなる男だったのか？ ハーンが過ごした日本の明治時代とは？ その激動の時代から私たちが、今学ぶこととはなにか――。

明治という時代と明治人の気風を、ハーンの足跡を辿りながら、タイムトリップできないものだろうか？

——それがこの物語を書く動機だった。

ハーンはアメリカで新聞記者として働き、シンシナティ、ニューオーリンズ、西インド諸島と旅を続けてきた。まるで人生が旅のような男である。

私もハーンと同じように長らく旅を続け、これまで駄文を積み上げてきた。この際、初心に帰り、ハーンの残した紀行文から学ぶべきものを検証したくもあつた。もはやハーンの生涯よりも私は長生きしているが、好きな鉄道（この時代、鉄道しかなかった）に乗り、ハーンを追いかけることができたなら、これ以上の冥途への“土産”はないだろう。

ハーンを追う私の旅は、平成二二（二〇一〇）年春、折しもハーン生誕一六〇年、来日一二〇年の節目の年からはじまった。

第一章 アムトラツクの車窓から

（ニューヨークからシンシナティへ）

厳冬のニューヨークへ

二〇一一（平成二三）年一月一七日、午前一〇時一五分、ニューヨーク。ジョン・F・ケネディ空港は雪が降っていた。

気温、マイナス五度。暖冬の東京から来たせいかな、寒さに身が引き締まる。

レキシントン街五六番通り、ホテルの部屋は一七階で、摩天楼のただ中であつた。

窓を開けると、雪は上からではなく、下から吹き上げてきた。煉瓦色の古ぼけた隣のホテルが眼下に見え、その屋上には錆びついた巨大な給水塔がそそり立っている。この街では一九世紀の建物がいまだ健在だつた。その向こうにクライスラービルが聳えている。アールデコ調で、貝殻のようでもあり、魚の鱗うろこのようにも思えるおなじみの尖塔が天を突いていた。

ニューヨークは思い出の街である。一九八〇年代の前半、毎年のように通ったことがあった。三〇代の駆け出しのルポ・ライターの頃で、同世代の若い無名のアーティストやダンサーたちの取材を重ねた。

摩天楼を眺めていると、懐かしい人々の顔が映画のカットバックを見るように流れた。その当時、ニューヨークは荒廃した戦場のようだった。犯罪は人通りの少ない街路やメトロの車内にまで及び、野良犬さえもとげとげしい眼を放ち、周囲を警戒しながら歩いていた。

今、眼下には整然とした清潔な街並みが広がり、路上には吸い殻さえ落ちていない。屋根に大きな看板を載せたポンコツそのものといったイエローキャブは姿を消し、タクシーは四駆の黒塗りの新型ステーションワゴンに替わっていた。ダーティで、鯁すえた街の匂い、ポルノとドラッグの猥雑わいざつさが交錯したあの頃の危険な空気はもはやない。

氷雨のレキシントン街を中国系の“新富裕層”の家族連れが三々五々、ブランド品の買い物袋を手に闊歩かつぽしていた。

ハーンがロンドンから移民船に乗り、ニューヨークに着いたのは一八六九（明治二）年のことだった。一九歳の青年の眼に映ったのも、失業者のたむろする危険な、薄汚れた街だった。

アメリカ合衆国はもとよりイギリスの植民地で、イギリス国教会から追われた清教徒やスコットランドの貧農が東部沿岸地方を開拓した。その後世界中から移民を受け入れ、彼らの安

い労働力で産業革命をなしとげた。一九世紀の終わりには、早くも世界一の工業国になっている。

自由の女神像が立つリバイティ島の隣にエリス島がある。小さく平らな人工島だが、そこに移民局が置かれていた。記録によれば、一八六〇年から一九〇〇年までの四〇年間に米国への移住者は約一四〇〇万人に達している。米国の総人口は当時三一四〇万人だったから半数近くが他国からの移民だった。

ハーンもそんな貧しい移民のなかのひとりだった。

ギリシヤの離島で生まれ、アイルランドで育った

パトリック・ラフカディオ・ハーンは、一八五〇（嘉永三）年六月二七日、ギリシヤのレフカダ島で生まれた。

レフカダ島はギリシヤ西方、イタリアにも近いイオニア海に浮かぶイオニア諸島の離島で、ギリシヤ本土と今は道路でつながっている。イオニア諸島は今でこそ国籍はギリシヤに属するが、歴史的には複雑な経緯を辿ったところで、中世から近世にかけてはヴェネチアとオスマントルコが代わる代わる支配した。“海のシルクロード”の交易路にも当たり、アラブ人の往来

も頻繁で、地中海世界とオリエント世界が渾融こんゆうしており、ハーンが生まれたときは英国が植民地支配をしていた。

陽光あふれるイオニア諸島は、西洋人たちの保養地でもあった。そのひとつ、コルフ島にはハプスブルク家のエリザベート妃の離宮があり、またスコルピオス島はギリシヤ人富豪のオナシスが購入した島として有名になったところだ。レフカダ島も近頃ではカイトサーフィンの名所となっている。

ハーンの父親チャールズはダブリンに住むイギリス人で、英陸軍に所属する軍医だった。父親はこの地に赴任しており、駐屯部隊にいた。

母親のローザ・カシマチは島の娘で、鼻筋が通り、黒い瞳の美人だった。チャールズが島のどこかでローザに出会い、一目惚れした。二人は熱烈な恋をして、両親の反対を押し切り結婚する。チャールズ三〇歳、ローザ二五歳のときだった。ラフカデイオという名はレフカダという島の英名にちなんでいる。

ハーンが二歳になったとき、チャールズが転任となったため、ハーンは母に連れられて、父の実家、アイルランド（当時は英国の統治下にあった）のダブリンへ移った。

ダブリンでの暮らしは悲惨だった。父のチャールズはほどなくクリミア戦争に従軍し、不在となり、実家に残った母は孤立していた。ローザはもともと光あふれる離島に生まれ、ギリシヤ

正教のもとで洗礼を受け、のびのびと明るく育った土地の娘だ。一方、ハーン家は教養ある厳格なイギリス軍人の家系でイギリス国教会である。英語が話せず、本も読めないローザを息子の嫁とするのに、しゅうとめ姑は反対だった。そんな嫁姑の間がうまくゆくはずがない。

ローザにはなによりもアイルランドの陰鬱いんうつな気候が我慢できなかつた。冬は長く、どんよりとした鉛色の雪雲が天空を覆う。夏は短く、雨が降れば、たちまち底冷えした。さんさんと陽の輝くイオニアの暮らしに慣れたローザは、その激しい寒冷の気候に耐えられなかつた。ハーンが六歳のとき、母は生まれ故郷のギリシャへと帰ってしまった。以後母子はふたたび会うことはなかつた。

一方、父親のチャールズは身勝手なもので、クリミアから帰ると、かつての同級生で以前から思慕していた女性に接近し、相手が寡婦となるや、求婚する。ハーンを実家に預けたまま、今度は新しい家族とともにインドへ転任してしまった。わずか七歳の自分を残して去った父親をハーンは生涯憎むことになる。ハーンの生涯に及ぶ精神風土の根底というべきアングロサクソン嫌い、キリスト教嫌い、は自分を捨てた父親への反感に根づいている。

両親ともどもに見捨てられたハーンは、子供のなかつた大叔母（父チャールズの母方の叔母）のサラ・ブレナンに引きとられた。幸い大叔母は資産家で、ダブリン郊外の邸宅に暮らしていた。ハーンの最初の幽霊との遭遇はこのときの体験によるものだ。

本来、茶目つ気があり、いたずら好きな少年だったが、お仕置きされて、しばしば牢屋のよ
うな暗い部屋に閉じ込められる。両親の温もりのないひとりだけの部屋で、幼少のハーンは孤
独な夜を過ごした。恐怖と暗闇のなかにしばしば悪魔の影を見る。また母親代わりの乳母が語
るアイルランドの妖精や妖怪の物話も、幼い脳裏に刻み込まれた。

一一歳でダブリンを去り、フランスのノルマンディにある神学校に入学する。ハーン自らの
意思ではなく、ヘンリー・モリヌーという大叔母の縁者の奸策かんさくだった。ヘンリーは大叔母に近
づき、面倒をみるなかで、資産相続人の権利を得て、正統相続人のひとりだったハーンを大叔
母のもとから追い出しにかかった。ヘンリーはその後、大叔母の資産を使い、貿易事業に乗り
出すが、経営に失敗して破産する。大叔母こそ被害者である。その後、ダブリン郊外の陋屋ろうおくで
ひっそりと暮らし、ひとり惨めな生涯を終えた。

ハーンはノルマンディの神学校を退学し、一三歳でイギリス中部のダラムにある神学校、ア
ンヨー・カレッジに転学した。聖職者にするのが大叔母の希望だった。

在学中、一六歳のとき、友人たちと回転ぶらんこで遊ぶなかで、ロープの結び目が左眼に当
たり、失明した。幼い頃から強い近眼だったが、そのうえ左眼をなくし、ハーンは以後ずっと
視力で苦しむことになる。

つらい少年時代だった。両親に見捨てられ、唯一の縁者である大叔母のもとを離れ、ハーン

は孤独だった。背は低く、ずんぐりむっくりで、鼻が異様に長い少年はいじめの対象になったかもしれない。弱者の保身術として、冗談や愛想笑い、周囲を笑わせる創作話が巧みになった。大叔母の破産で、アシヨー・カレッジを中退するが、その後のハーンについて詳しいことはわからない。

ハーンの青春像を探るとき、この時期は重要な部分だ。想像に頼るしかないが、父にも母にも見捨てられた孤児みなしごが裕福な大叔母のもとで育てられ、名門の神学校へ入学したまではいいが、大叔母が破産して、中退を余儀なくされ、大学へ進学できず、大都会の塵芥じんがいにまみれた。育ちの良さが、ここで一気に崩壊するのである。世をすねて不良となり、犯罪者となる可能性も十分あったように思う。

ロンドンのイーストエンドの貧民街で、その日暮らしの生活を送っていたという説や、パリの下町で野良犬同然の暮らしをしていた、という説もある。とにかくヘンリー・モリヌーの示唆さがあり、移民船に乗り、一九歳で単身アメリカへ渡った。

このとき、ハーンが自分のファーストネームだったパトリック（アイルランドの守護聖人）の名を消し、乗船名簿に国籍をギリシヤ人と自ら記したことはハーンの心境の変化を知る重要な手がかりだと思う。リヴァプールから移民船に乗ったとき、ハーンは自らの出自を消し、“世界の孤児”たらんことを宣言したのではなかったか？　つまり、“一匹狼”として開き直った

のである。

マンハッタン島に上陸した移民たちは、港近くの安アパートの一室に三家族、四家族とひしめき合って暮らした。ほとんど無一文の彼らはすぐさま港湾労働局やなめし革工場、製靴工場などへ働きに出て、日銭を稼ぎ、生活の第一歩を踏み出した。

ニューヨークのロウアー・イーストサイド。ソーホーとチャイナタウンに挟まれた一角は昔ながらの移民の街で、外階段が露出した、赤茶けた煉瓦造りの建物が密集しており、今も中国人、ウクライナ人、プエルトリコ人などの下層労働者が多く暮らしている。ハーソンのニューヨーク滞在の記録は残っていないが、渡米した一時、この界隈に住んでいたに違いあるまい。ニューヨークに着いた翌日、私はコロンブスパーク、ユニオン・スクエア、オーチャード通り、ドランシー通りなどの下町を歩いた。

リーマンショック以来、ニューヨークは世界的不況の震源地となっていた。通りにはシャツターを下ろしたまま閉店の店が多かったが、その片隅では古着や生活用品を並べたバザーが細々と開いており、虚ろな眼をした黒人女性が、道行く男たちをぼんやりと眺めていた。

地下鉄の工事現場で働く若者に、私は一九歳の濃茶色の髪と灰色の眼の青年の姿を重ねていた。

アムトラック特急は雪原を走った

ニューヨークに着いて三日目の朝、ペンシルバニア・ステーションへ向かった。

南回りシカゴ行きのアムトラック特急「カーディナル51」に乗るためだ。ハーンはニューヨークから列車に乗り、ひとりオハイオ州のシンシナティへ向かった。私はひとりハーンの跡を追っている。

アムトラック特急は午前六時四五分発だが、冬の駅はまだ深夜のように暗く、人影はない。入線してきた列車は六両編成。銀色のステイール製のボディで、窓部分に青と赤の二つの帯が入っている。最前部には、ブルドッグのようなつぶれた鼻の大型機関車がつき、いかにも巨大なアメリカ大陸を走る列車の雰囲気があった。ホームの案内放送を耳にしながら乗り込むと、乗客はまばらで、普通車の自由席はゆったりしており、頭上の荷物棚にスーツケースが楽々と収納できた。

発車すると、すぐさま車掌が検札に来た。でっぷりと太った黒人車掌である。腰に下げた鍵束をガチャガチャといわせている。

「シンシナティか？」

きつぷを眺めてつぶやく。「ナーテイ」と語末を伸ばすのが、正式の発音のようだ。指定席券がとれなくて心配したが、込み合っではおらず、二人席をひとりで占領している。通路を挟み、隣席は金髪の若者だった。顎ひげを蓄えて、キリストのような風貌だったが、すぐさま両足を投げ出して眠ってしまった。

車掌がどこからか飛んできて、注意する。

「ここでは足を伸ばしちゃならん」

キリストは小声で「エキスキューズ」と言い、素直に足を引っ込めて従っている。後ろの席では、女性の乗客がひとり、重い荷物を荷棚に上げようと苦労していた。

「手伝いますよ」と、席を立ったら、

「イツツ・オーケー」

手で私を制して、自分でスーツケースを担ぎ上げて収納し、

「アイリオン、ハロー」

振り返って、手を差し伸べて微笑んだ。アイリオンという愛らしい名だ。

アメリカがまだまだ“健全な道德の国”だということを、旅の当初から思い知らされた。若者のみだりな態度を叱る大人がおり、女性はなんでもかでも男に手を借りるといふことはなし。

ハドソン川をトンネルで抜け、地上に出ると、一面銀世界となった。

雪原に工場や住宅が点在し、ハルニレやモミの雑木林が続いている。民家は木造のシンプルな建物で、壁は白やグレー、屋根は茶色が多く、ニューイングランド風である。すでにすっかり郊外となっているが、まだ周囲は薄暗く、ライトを照らして走るクルマが見え隠れする。通過駅では通勤者が思い思いにホームに並んでいた。

食堂車に行くと、

「あと一〇分待ってくれ！」

準備に忙しそうな黒人の若者が言う。朝食の用意があることがわかって安心した。日本の長距離列車ではほとんど食堂車は併結しておらず、ともすると一日中食べられないことも往々にしてあるからだ。

ハーンは三八時間、飲まず食わずだった

一八六九（明治二）年九月、ハーンはシンシナティへの列車のなかで飢餓状態だった。三八時間、足の踏み場もないほど詰め込まれた“移民列車”で、飲まず食わずの旅だった。

向かいにはノルウェーの美しい娘が座っている。どこか高潔な気品が漂う少女に、一九歳の

青年の心は高まる。当時、スカンディナヴィア諸国からの移民は急増しており、一八八〇年代には一〇〇万人が移住した。少女の純情な横顔を見た瞬間、「この人のためなら死んでもいい」と思う。隣には浅黒い肌のユダヤ人がいて、「いい女だぜ」「好きになつたろう」などと言つて青年をからかう。青年は黙つてそれには応えない。

そのとき、突然、目の前に美しい白い手が伸びてきて、黒パンとチーズが差し出された。娘は英語で「おあがりなさい」と優しくに言う。青年はそれを受け取つてむさぼり食う。最後は一切れを食べ終わり、少女に礼を言うのを忘れていたことに気がついた。

改めて礼を述べようとするが、すでに遅かった。彼女は体を乗り出し、はっきりした口調で何か言った。ノルウェー語なので青年には理解できない。ただ怒りの表情だけが理解できた。ハーンはそのとき「汽車に轢かれて死んでもいい」と恥じ入った。

隣のユダヤ人は「ただお礼を言いたかっただけだ」と弁明してくれる。憤りの色は少女の表情から速やかに消えていった。しかし、もう誰もものを言わない。少女は「さよなら」も言わず、黙つてミネソタ州のレッドウイングへ向かうため、途中駅で降りていった……。

シンシナティへと向かう旅は、ハーンにとっては、最初から傷ついた旅となった。

ハーンがニューヨークからシンシナティへと辿つた鉄道の正確なルートは不明である。向かい合わせたノルウェーの娘がレッドウイングへ行くため、途中下車したところから察すると北

回り、シカゴ経由だったようだ。

当時のアメリカの鉄道はすべてが民間企業による私鉄だった。地方の馬車運搬業者や投資家が利権目的で作ったため、短距離を運営する私鉄会社が無数に生まれ、鉄道網は網の目のように張りめぐらされていた。

今、私が乗るアムトラックは連邦政府出資の株式会社で、全アメリカの旅客便を管理運営している。現在ニューヨークからシンシナティへは、ワシントンDCを経由するこの南回りシカゴ行きの方が便しかない。ルートからすれば、ハーンが乗った北回りよりも、こちらのほうが距離は短いはずである。それでも距離は八二八マイル（約一三二五キロ）あり、所要一九時間。ちなみに料金は八八ドル（約九〇〇〇円）で、日本のJRに比べれば格安で、航空運賃の七分の一くらいだった。

八時一〇分、フィラデルフィアに着く。右手に高層ビルが立ち並ぶ市街が現れた。

フィラデルフィアはペンシルバニア州最大の都市で、一六八二年にクエーカー教徒の始祖ウィリアム・ペンが切り拓いた街として知られる。

ハーンは来日する一年前の一八八九（明治二二）年、この街に半年ほど滞在しており、日本への渡航もこの街で決めたのだった。

眼科医のジョージ・グールドの家の一室を借り、眼の治療を兼ねて、西インド諸島の黒人奴

隷娘を扱った小説「ユーマ」の推敲や「カルマ（因果）」の執筆に励んでいた。「カルマ」は先妻と別れ、子供まである男が、ふたたび出会った美女との恋に陰々滅々と悩む物語で、「永遠の恋人」ともいうべきエリザベス・ビスランドへの思慕を込めたもの、といわれる。

ビスランドとはニューオーリンズではじめて出会った。ハーンはそのとき、大手新聞社のタイムス・デモクラットの文芸部長をしており、おそらく来日前の彼の生涯のなかではもつとも輝かしい地位にあった。

ビスランドは美貌の持ち主で、教養に富み、文学的才能を秘めた女性で、少女時代から新聞に詩や文芸評論を投稿し、才能を発揮していた。自らの投稿原稿の評価を聞きに新聞社に現れたビスランドに面会したハーンは、たちまち胸をときめかす。

一通の手紙が残っている。ハーンにとっては珍しく、彼女への愛を告白したものだ。

ぶしつけにも写真を頼みましたが、まさかあなたがそれを私にくださるほど親切であらうとは、夢にも思いませんでした。私はおかしいほど幸せを感じました……。写真にはあなたに、少くともあなたの中のもう一人に似ています。——どんなに友人として親しく関係が深くても、あなたの場合、——あなたは死んだ美しい女性たちの魂の合成にちがいないことをわかっていながら——類のない第二の人物「写真にうつった

あなたの姿」を眺めて楽しむことはけっして文字通り許されないのでしよう。——人はあなたに決して正直にいいません。「おまえが好きだ」と。しかし本当に、「私はあなたが好きです！ 本当に。」

（「エリザベス・ビスランド宛書簡」『知られざるハーン絵入書簡』関田かおる編著）

このとき、ハーンはフィラデルフィアにおり、一方、ビスランドは『コスモポリタン』誌の記者として活躍しており、「世界一周早回り」の体験紀行を任され、ニューヨークからすでに遠く離れていた。

新渡戸稲造、青春のフィラデルフィア

フィラデルフィアは、日本人の新渡戸稲造にとってもゆかりの街だった。

ハーンが滞在した二年後の一八九一（明治二四）年、米国留学中にクエーカー教徒となった新渡戸稲造は、同じ教徒のメアリー・エルキントンとこの街で結婚した。フィラデルフィアは妻のメアリーとめぐり会い、結婚式を挙げた街でもあり、クエーカー教徒・新渡戸の精神のふるさととなっていた。

新渡戸稲造は文久二（一八六二）年に盛岡南部藩士のもとに生まれ、札幌農学校（北海道大学の前身）へ進み、ウィリアム・クラークの影響下でキリスト教徒となり、卒業後渡米した。帰国して、農業経済学者、教育者となり、東京帝国大学教授や東京女子大学学長などを歴任した。ハーンより年は一回り若いのが、ほぼ同時代に生きて日本人である。

主著『武士道』は封建時代のサムライの心を、アメリカ人の妻や教養人にわかりやすく説き明かしたもので、日本人の精神風土である仏教、神道、儒教を解説しながら、「武士道はキリスト教や騎士道にも通じる心の道だ」と説いている。

時あたかも日本は日清戦争に勝利し、全世界の眼は極東の小国に注がれていた。『武士道』は、その日本人の精神とは何か？ という疑問にやさしく答えた本で、アメリカで出版されたものである。当時の大統領、セオドア・ルーズベルトは、この本に感動し、六〇冊買い求めて、子供や友人に贈ったというエピソードが残っている。

新渡戸稲造とラフカディオ・ハーン、二人の出会いはなかったらどうか。『武士道』のなかにはハーンについての記述がある。

武士道の影響が、今日でもなお明らかに残っていることは、すぐにもわかる。日本人の生活の一端を見ただけでも明白であろう。さらに、日本人の心を最も雄弁にかつ

忠実に代弁した、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）の著書を読めば、彼の描く日本人の心の働きが、武士道の働きの一例であることがよくわかるだろう。

（新渡戸稲造『武士道』須知徳平訳）

新渡戸稲造は晩年、国際連盟の事務局次長に選出され、“ジュネーブの星”と呼ばれて活躍した。日本で軍国主義の気運が高まるなか、戦争を否定し、軍閥と共産党を批判したため、双方から国賊扱いされ、一方、米国側からも保守派として警戒されて孤立し、一九三三（昭和八）年、カナダのヴィクトリアで客死した。

日米の太平洋の懸け橋となるべく新渡戸とハーンの志は似ていたが、新渡戸が“国際人らしい日本人”だったのに対して、ハーンはあまりにも“日本人らしい国際人”だった。二人はまたそれぞれの渡国で骨を埋めることになる。

西部開拓への道

フィラデルフィアを出ると、アムトラック特急はボルティモア、ワシントンD.C.に停まっていた。

ワシントンD・C.では機関車の交換、給水のため一時間の停車があった。ホームに出る人は皆スモーカーで、キリストもアイリーンもタバコを吸いに降りてきた。

「シカゴへよ。一日がかりよ。でも楽しいわ。いつもなら飛行機だけど一度列車に乗ってみたかったの」

アイリーンはどこか遠足にでも行くような気分で、気軽に声をかけてきた。

世界中、禁煙の嵐で、スモーカーは肩身が狭い。喫煙者同士がひっそりとホームの片隅に寄り集まる風景は日本と同じだ。ハーンも実は極め付きのヘビースモーカーで、講義のときにも、水泳を楽しむときにもパイプを手放さなかった。つい昨日までこの国はマルボロ、キャデラック、ワイルドターキーの国だった。ところが今やすっかりクリーン、ヘルシー、エコロジーの国に変貌している。

ホームではちよつと嫌な出来事があった。

見知らぬジーンズ姿の若者が私に近づいてきて、「タバコをくれ」と言う。一本差し出すと、二〇ドル札を見せて「一箱売ってくれ」。

「余分な箱はない」と、三本だけ差し出すと、三ドルを私の手に握らせようとする。「金はない」という仕草を見ると、男はホームにそのまま紙幣を投げ捨てていった。一体どういう意味なのだろうか？

「イエローにはタダではもらわない」という人種差別なのか？ 屈辱的な気持ちを抑えて、私はホームに舞い落ちた三ドルを拾った。

ハーンは神学校時代のほつれた制服を着て、移民列車に乗っている。ニューヨークから三時間かかったというから、当時は私鉄を次々と乗り継いで行ったのだろう。乗り換えでは二時間、三時間の待ち合わせは常だった。食事をとる金もなく途方に暮れた。

当時合衆国政府は「希望あふれる新天地」の夢をヨーロッパ中に喧伝けんでんしており、移民を勧誘していたが、実際に文明が開けていたのは東部一三州か、あるいは綿花王国のジョージア州あたりしかなかった。名ばかりの「新天地」はどこも広漠とした平原が広がり、未開で、苦難をともなう荒地だった。

行き場をなくした南軍の敗残兵たちも未開の西部をめざし、「明白なる天命（マニフェスト・デステイニー）」なる神の言葉に導かれ、西部開拓へと向かっていた。

移民はヨーロッパ僻地へきちの農民や労働者が中心で、アイルランド人、スコットランド人、ドイツ人、ユダヤ人が多く、あるいはアジアからの中国人も交じっていた。とくに一八四五年から四年間続いた「ジャガイモ大飢饉」で、アイルランド移民は一〇〇万人に達していた。それぞれの服装は自国流、言葉もばらばらで、まがりなりにもハーンのように教育を受けた者は多くはなかった。

一九歳という年齢を思うとき、それはあまりにも孤独な旅だった。

オハイオ川に沿って

列車はゆつくりと勾配を上っている。

地図を見ると、アパラチア山脈のただ中にいるはずだが、高い山は一向に現れず、車窓にはずっと茶枯れた高原が流れていた。

アパラチア山脈は南北に約二六〇〇キロ、カナダまでつながる長大な山脈だが、このあたりではバージニア州とウエストバージニア州の州境をなしている。東部に入ったイギリス系の開拓農民たちが、西部の大平原をめざして越えてきた伝説の山脈である。若き日のゲーリー・クーパーがオスカーを受賞した映画『ヨーク軍曹』は、このあたりを舞台にしていたが、荒々しい山峡といった映画の雰囲気とは違い、実際は標高一〇〇〇メートルほどのなだらかな高原だった。

一四時〇五分、シャーロットツヴィル駅に停まる。二〇分の停車があった。

ニューヨークから三四〇マイル（約五四四キロ）。こせんきょう跨線橋も、ホームもなく、列車はそのまま地上に停まった。今も西部劇そのままである。車掌は下車する客のためにドアの下に脚立を

置いた。

「ワッチャーステ、ワッチャーステ（ウオッチ・ユア・ステップ）」

黒人訛りの言葉に、ハーンの描いたニューオーリンズの下町の風景がふと浮かんだ。物売りの独特の声やイントネーションにハーンは南部への親しみを感じた。

「アンブル、アンブル（アンブレラ、アンブレラ）」

ちようど時雨となり、ホームに傘を売りに来る黒人の男も独特な言葉の調子だった。耳慣れないアクセントに、いよいよ深まった異郷を感じる。

キリストとアイリーンも降りてきた。キリストが「タバコを交換しよう」という仕草をして、話しかけてきた。

「どこからだい？」

「東京からだ」

「仕事かい？」

「そうだ。ぼくはジャーナリストで、ラフカディオ・ハーンを追いかけている。ハーンって知っているか？」

「知らないよ、誰、それ？」

拙い英語でハーンのあらましを紹介した。

「へえ、うまくやってよ」

キリストは興味なさそうにお愛想で答えた。アイリーンもタバコの煙をふかしながら聞いている。彼女もやはり「ハーンは知らない」と言う。彼らにはロックミュージシャンの話のほろがよかったかもしれない。

冬の日暮れは早い。座席に戻り、食堂車で仕入れた缶ビールを飲み、うとうととしていたら、列車はすでに夕暮れのオハイオ川沿いを走っていた。山の稜線が近づいた。

アメリカの鉄道紀行作家、テリー・ピンデルがこのあたりの車窓風景を書いている。

ヒントンは鉄道マニアのメツカだ。秋には毎年、この小さな街がハンティントンを出発するニュー・リヴァー蒸気機関車旅行の終点になる。だが、春のこの日には、町はウエスト・ヴァージニアの各地で見たのと変わらないうらぶれた印象だ。ヒントンを過ぎてすぐ、列車は音高くグレート・ベンド・トンネルを走り抜けた。ここは、あの伝説的な「鋼鉄打ち込み屋」ジョン・ヘンリーがハンマーを降ろして息絶えたところだ。

（テリー・ピンデル『アメリカ鉄道3万マイル』宮脇俊三、小林理子訳）

ジョン・ヘンリーは伝説の黒人の巨人である。鉄道建設に従事していたヘンリーはハンマー打ちの名手で、鉄道会社が導入した蒸気ハンマーと競争して勝ったが、最後に息絶えて亡くなった。以来、機械化がはじまり、黒人労働者は職を失ってゆく。多くのカントリー歌手がその悲哀に満ちたバラッドを歌っている。

午後八時過ぎ、食堂車のラストオーダーのアナウンスが入った。食堂車に行くと、がっしりした体格の紳士が目の前に座っていた。黒いカウボーイハットを椅子に置き、ジーンズのジャケットを着たいかにも老カウボーイ。俳優のジェフ・ブリッジスを思わせる風貌の男である。

「サム・マッキンタイアだ。どこからだい？」

「東京から。シンシナテイへ行く」

サムはカンザスの牧場主だと言った。

「仕事かい？」

「まあ、そうだ」

ハーンのことを話そう、と思ったが、風貌からして、とても知っているとは思えないので、躊躇ちゆうちゅうよしていると、

「おれはカンザスシテイまでさ。シンシナーテイで一泊して明日乗り換える」

西部の男はスローで、無口のはずであったが、時代は変わっていた。男は結構早口で、おしゃ

べりなのである。

ビールかと思いきや、赤のハーフワインを注文し、いかにも大切そうに、ちびりちびりとワインを飲む。コルクの匂いを嗅ぎ、ポケットへ入れた。わが家への土産にするのだろうか。

「シンシナーティは大きな街だよ。人口は三〇万人くらいかなあ。これはオハイオ川だ。シンシナーティまでずっと続く」

オハイオ州のことをきくと、顎をなで、一瞬ためらったが、

「そうだな。オハイオは北軍だったんだ。大統領になった例のグラントの出身地だ。知っているだろ？ 将軍だった」

「ジョン・ウエインが演じたね。映画『西部開拓史』では」
合の手を入れる。

「そうだ。オハイオ州は大統領の産地ともいわれておる。グラント、ヘイズ、ガーフィールド、マッキンリー、えーと、それから、何しろ八人出しておるんだ。それに野球だ。レッズがあるからな。サイ・ヤング、タフイ・ローズ、ロジャー・クレメンズ、ジョージ・シスラー。スーパースターがいっぱい出ている」

「シスラーは知ってる。イチローが記録を抜いただろ？」

「イチロー？ そうだ、そうだった」

「ジャパニーズ・ベースボール、知ってるかい？ サムライ・ベースボールっていうんだ」
「オオ、サムライ！ ショーグン！ ハラキリか？」

サムは五三歳。二人の娘がいる。頭はつるりとしており、顔だけ見れば七〇歳ほどの老人に思える。ベトナム戦争に従軍したとき、横須賀よこすかに滞在した。

「今の若い奴は銃を平気で撃つから気をつけろよ。シンシナーティもカンザスシティも治安はよくない。アフガン帰りの若いのが、平気で銃をぶっ放すからだ。忠告しておくが、バックストリート（裏街）の危ないところへは行かないほうがいいぞ」

牧場の景気はよくないようだ。オーストラリアや南米から安い牛肉が輸入されて市場を乱している。ステーキをぺろりと食べて、「まあまあだ」という顔で、後味を楽しんでいた。食後、コーヒーに砂糖とミルクをたっぷり入れてかき回し、一気に飲み干した。

「じゃあな」

男は大きな革の財布をズボンのポケットから取り出し、気前よく二〇ドル札をチップに置いていった。

いつしか列車は川沿いを北上していた。左手に街の光が浮かぶ。川は大きく開けていた。機関車の低音のオルガン音をつぶしたような汽笛がやけに大きく聞こえる。

「間もなくシンシナーティ、シンシナーティ」

アナウンスが入る。

時計を見ると、午前一時三三分。予定より三〇分遅れだ。

一三〇〇キロを一九時間！　ようやく着くんだ、という期待と不安がこみ上げてきた。

小泉八雲、旅に暮らす
へるん先生の汽車旅行
芦原伸・著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社
定価 1,700 円（本体）＋税
ISBN 978-4-7976-7267-1

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)